

新保育士養成課程における乳児保育の展開

著者	工藤 ゆかり, 那須 杏奈
雑誌名	北翔大学北方圏学術情報センター年報
巻	11
ページ	15-22
発行年	2019
URL	http://id.nii.ac.jp/1136/00003113/

研究論文

新保育士養成課程における乳児保育の展開

工藤ゆかり¹⁾ 那須 杏奈²⁾

1) 北翔大学教育文化学部教育学科 2) 北翔大学北方圏学術情報センター学外研究員

抄 録

ここ7年間で乳児保育の利用率が1.5倍となり、乳児保育は拡充の一途をたどっている。それに伴い保育士養成課程も改訂され、2019（平成31）年4月から新課程での保育士養成がスタートした。「乳児保育」の科目は、講義科目が新設され単位数も1単位増えた。この科目の中で、乳児保育に関する理念や現状、保育の体制など、必要となる基礎的事項について理解を深めた上で、具体的な保育の方法や環境構成等を学び、より円滑に保育の実践力の習得につなげていくことを目指している。また、乳児保育に関する関連科目である「保育の心理学」では乳児の心の発達について捉え、「子どもの保健」では乳児の身体的な発育・発達について捉え、「保育内容総論」では乳児保育の内容・展開について捉えることが求められている。本学の学生の現状として、核家族の中で育ち乳児と関わる機会は限られていたことから、乳児期及び幼児期前期に特徴的な保育技術の獲得が出来ていない、乳児の発育・発達に関する理解が不十分である学生がいた。これらの知識及び技術を習得するためには、「乳児保育」の学びは勿論であるが、保育士養成課程の様々な科目の中で、反復しながら学び、身に付けていく必要がある。そのためのツールとして、「発育・発達に関するシート」、「子どもを育てる遊びシート」を取り入れた。これは、学んでいる学生自身が科目と科目をつなげ、繰り返しの中で乳児保育の実践力を高めるために有効であると考えられる。加えて、「保育実習指導」で乳児保育の実践を体験したことで、乳児保育関連科目で学んだ理論と保育現場での実践がつながるきっかけとなった。今後の新保育士養成課程における乳児保育は、「乳児保育」と関連科目の連携及び各科目で学んだ理論と保育現場の実践と行き来しながら、乳児保育の実践力を高めるよう展開するものとする。

キーワード：乳児保育利用率の高まり、乳児保育と関連科目の連携、理論と実践の行き来

I. 問題と目的

厚生労働省の「保育所等関連状況取りまとめ（平成30年4月1日）」¹⁾によると、2018（平成30）年度の1・2歳児の保育所等利用率は47.0%と、全ての1・2歳児の半数近くが保育所を利用している状況が分かった。7年前の2011（平成23）年度の31.0%と比較すると、利用率は1.5倍となり、1・2歳児の保育所等の利用が顕著に上昇した。同様に、0歳児の利用率も上昇している。

2019（令和元）年10月から保育所・幼稚園・認定こども園に通う3～5歳児の幼児教育・保育が無償化となり、0～2歳児は世帯年収が250万円未満の世帯は保育料が無償化となる。このことをきっかけに、0～2歳児の保育所等の利用率が更に上昇する可能性もある。

このように0～2歳の保育の需要が高まっていることを受けて、厚生労働省による保育所保育指針が2017（平成29）年に改正され、2018（平成30）年4月から新たな

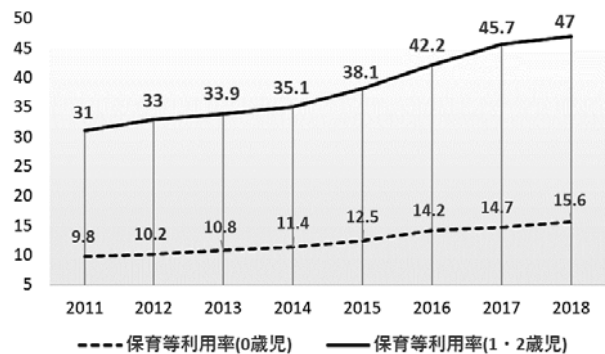


図1 0・1・2歳児の保育所等利用率の推移

※厚生労働省「保育所等関連状況取りまとめ」（平成30年4月1日）データを基にグラフを作成

指針に基づく保育がスタートした。改定のポイントは、今まで保育の5領域のねらいと内容は、3歳以上児のみ記載されていたが、乳幼児期の特性を踏まえ、0歳児に新たなねらいと内容、1歳以上3歳未満児に保育内容5領域のねらいと内容が新設された。

0歳児の保育に関するねらいとして、0歳児に合わせた①身体的発達に関する視点「健やかに伸び伸びと育つ」、②社会的発達に関する視点「身近な人と気持ちが通じ合う」、③精神的発達に関する視点「身近なものに関わり感性が育つ」の3つの視点に沿ったねらいと内容が出された。発達が未分化である0歳児は、生活や遊びを通して、身体的・社会的・精神的発達の基礎を培う時期である。上記の3つの視点で捉えると、保育を構想しやすく、子どもの育ちも評価しやすいと考える。

また、3つの視点と5領域は関係があるということが、厚生労働省の「保育所保育指針の改定に関する議論のとりまとめ」²⁾にて示されている(図2参照)。

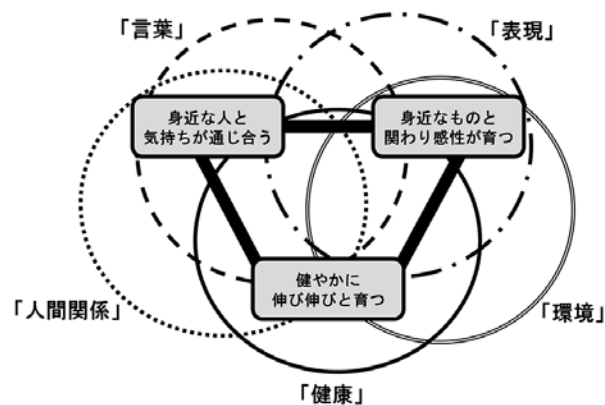


図2 0歳児の保育内容の記載イメージ

※厚生労働省保育所保育指針の改定に関する議論のとりまとめ（平成28年12月21日）より

1歳以上3歳未満児の保育に関して、「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」のねらいと内容が新たに記載された。3歳以上児と同様の5領域の目標と評価視点の分類であるが、1歳児、2歳児の発達の特性に応じたねらいと内容が明記されたことで、3歳までにできるようになることが望まれること、保育士が行うべきことが明確になった。また、上記の図によって示されたように、0歳児の乳児の発達から1歳児、2歳児の幼児期前期の発達が連続していることをより意識しながら、保育に当たることができると思う。

保育を取り巻く社会情勢の変化及び2018（平成30）年の保育所保育指針の改定等を踏まえ、より実践力のある保育士の養成に向けて、新たな保育士養成課程が2019（平成31）年4月からスタートした。

内容としては、①乳児保育の充実、②幼児教育の実践力向上、③「養護」の視点重視、④子どもの育ちや家庭

支援の充実、⑤社会的養護や障害児保育の充実、⑥保育者としての資質・専門性の向上、これらを目指して保育士養成課程を構成する教科目が変更及び再編となった。

乳児保育の充実が1点目に挙げられており、今まで「乳児保育（演習2単位）」のみであったものが、「乳児保育Ⅰ（講義2単位）」と「乳児保育Ⅱ（演習1単位）」と、演習科目に加え、講義科目が新設された。

本学教育学科幼児教育コースの学生は、3年次の2月に保育実習Ⅰで保育所、3月に保育実習Ⅰで施設の実習を行う。保育実習Ⅰに行く直前の3年後学期に「乳児保育（演習2単位）」を受講してから保育実習Ⅰに向かう。学生の傾向として、赤ちゃんはかわいい、赤ちゃんのお世話をしたいと乳児に関わることに期待する学生と、言葉を理解できない赤ちゃんにどのように接してよいかわからない、「乳児保育」の授業でおむつ換えや授乳の演習をしたけれどできるかどうか心配であるなど、不安や戸惑いを示す学生も見受けられた。

また、乳児を対象とした保育の計画を立て、模擬保育に取り組んだ際には、乳児の発達・発達に応じた乳児保育の内容や展開の在り方がイメージできなく、年齢や発達に即していない保育案を考える学生もいた。

そこで、本学保育士養成課程は、今後益々需要が高まるであろう乳児保育に対応できる保育士を養成する必要がある。本研究は、乳児保育の基本的事項を理解した上で、保育の実践力を習得した学生を養成することを目的として、新保育士養成課程における乳児保育に関する授業内容・授業展開の在り方、及び他の乳児保育に関連する科目間で連携した体系的な乳児保育の学びについて明らかにすることを目的として取り組むものとする。

Ⅱ. 新保育士養成課程における乳児保育の学び

厚生労働省が設置した「保育士養成課程等検討会」によると、新保育士養成課程へ変更の趣旨の1点目に、乳児保育の充実が挙げられた。そこでは、乳児保育に関する内容を充実し、教育効果を高めるために、今まで「乳児保育（演習2単位）」であったものを、「乳児保育Ⅰ（講義2単位）」と「乳児保育Ⅱ（演習1単位）」とした。この科目の中で「乳児保育に関する理念や現状、保育の体制など、必要となる基礎的事項について理解を深めた上で、具体的な保育の方法や環境構成等を学び、より円滑に保育の実践力の習得につなげていくことが必要である。」³⁾と示している。さらに、乳児保育の科目のみで養成するのではなく、「複数の教科目に含まれる関連する教授内容等を体系的に整理し、関連性を明確にすることが必要である。」³⁾とも示している。具体的には、「保育

の心理学（講義 2 単位）」、「子どもの保健（講義 2 単位）」、「保育内容総論（演習 1 単位）」等の科目にも、乳児保育に関する教授内容が含まれている。それらの相互の関連性を体系的に整理し、内容を充実することが求められている。

「乳児保育Ⅰ（講義 2 単位）」は、乳児保育に関する理念や現状、保育の体制など、必要となる基礎的事項について理解を深める講義科目であり、「乳児保育Ⅱ（演習 1 単位）」は、具体的な保育の方法や環境構成等を学び、より円滑に保育の実践力の習得につなげていく演習科目である。乳児保育に関する関連科目である「保育の心理学」では乳児の心の発達について捉え、「子どもの保健」では乳児の身体的な発育・発達について捉え、「保育内容総論」では乳児保育の内容・展開について捉えることが求められている。

乳児保育の充実の中心的役割を果たす「乳児保育Ⅰ（講義 2 単位）」では、「乳児保育における養護と教育」、「乳児保育及び子育て家庭に対する支援をめぐる社会的状況と課題」の内容が加わった。

「乳児保育における養護と教育」に関して保育所保育指針の改定では、保育所は養護と教育を一体的に行うことがより一層強調された。満 3 歳以上は幼稚園でも保育所でも認定こども園でも同じ教育を行う共通化が図られ、保育所も幼児教育を行う施設として子どもに育みたい資質・能力と幼児期の終わりまでに育ってほしい姿が明記された。その基盤は、0 歳児の保育であり、1 歳以上 3 歳未満児の保育における実践が、3 歳以上の保育につながる。それらのことから、0 歳児の保育及び 1 歳以上 3 歳未満児の保育における養護及び教育の一体性についても理解したうえで保育実践に当たる必要があることから、「乳児保育Ⅰ」の内容に加わったと考える。

「乳児保育及び子育て家庭に対する支援をめぐる社会的状況と課題」に関しては、保育所保育指針改定の経緯にあるように、少子化や核家族化、地域とのつながりの希薄化の進行、共働き家庭の増加などを背景に、乳幼児と関わる経験が乏しいままに親になったり、親になってからも身近な人々から子育てに対する協力や助言を得られにくい状況に置かれていたりする家庭も多い。児童虐待の相談対応件数も増加しており、それらの状況を理解したうえで保護者にとって一番身近な保育の専門家である保育士が子育て家庭を支えていく必要性が高まっている。

「乳児保育Ⅱ（演習 1 単位）」では、乳児保育の基本である「子どもと保育士等との関係の重要性」、「個々の子どもに応じた援助や受容的・応答的な関わり」、「子どもの主体性の尊重と自己の育ち」、「子どもの体験と学びの芽生え」の内容が加わった。子どもが安心して園生活

を送るには、保育者との温かい密接な関わりが必要である。また、特定の大人との愛着が形成されることが、その後の人間関係を形成する基盤となる。愛着形成をするためには、受容的・応答的な保育者の関わりが大切であり、そのことが子どもの主体性を育むことにもつながる。主体的に活動する子どもは、様々な人やものに関わる中で、学びの芽生えが育まれる。その具体的な実践の在り方を修得するのが、「乳児保育Ⅱ（演習 1 単位）」の科目の目的であると捉える。

新保育士養成課程で示す各科目の目標は、以下の通りである。

表 1 新保育士養成課程における乳児保育に関する科目の目標

乳児保育Ⅰ	乳児保育の意義・目的と歴史的変遷及び役割等について理解する
	保育所、乳児院等多様な保育の場における乳児保育の現状と課題について理解する
	3 歳未満児の発育・発達を踏まえた保育の内容と運営体制について理解する
乳児保育Ⅱ	乳児保育における職員間の連携・協働及び保護者や地域の関係機関との連携について理解する
	3 歳未満児の発育・発達の過程や特性を踏まえた援助や関わりの基本的な考え方について理解する
	養護及び教育の一体性を踏まえ、3 歳未満児の子どもの生活や遊びと保育の方法及び環境について、具体的に理解する
	乳児保育における配慮の実践について、具体的に理解する
保育の心理学	上記を踏まえ、乳児保育における計画の作成について、具体的に理解する
	保育実践に関わる発達理論等の心理学的知識を踏まえ、発達を捉える視点について理解する
	子どもの発達に関わる心理学の基礎を習得し、養護及び教育の一体性や発達に即した援助の基本となる子どもへの理解を深める
子どもの保健	乳幼児期の子どもの学びの過程や特性について基礎的な知識を習得し、保育における人との相互的な関わりや体験、環境の意義を理解する
	子どもの心身の健康増進を図る保健活動の意義を理解する
	子どもの身体的な発育・発達と保健について理解する
	子どもの心身の健康状態とその把握の方法について理解する
保育内容総論	子どもの疾病とその予防法及び他職種間の連携・協働の下での適切な対応について理解する
	保育所保育指針における「保育の目標」「育みたい資質・能力」「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」と「保育の内容」の関連を理解する
	保育所保育指針の各章のつながりを読み取り、保育の全体的な構造を理解する
	子どもの発達や生活を取り巻く社会的背景及び保育の内容の歴史的変遷を踏まえ、保育の内容の基本的な考え方を、子どもの発達や実態に即した具体的な保育の過程（計画・実践・記録・省察・評価・改善）につなげて理解する
	保育の多様な展開について具体的に理解する

Ⅲ. 本学における乳児保育の展開

1. 本学保育士養成課程における乳児保育の位置付け

本学保育士養成課程の旧養成課程と今年度スタートした新養成課程の乳児保育に関する科目の位置付けは以下の通りである。

表2 本学における新旧保育士養成課程の乳児保育に関する科目の開講時期

開講時期	旧養成課程	新養成課程
1年前学期	保育内容総論	保育内容総論
2年前学期	子どもの保健Ⅰa	子どもの保健
2年後学科	子どもの保健Ⅰb	
3年前学期	子どもの保健Ⅱ	乳児保育Ⅰ
3年後学期	乳児保育 保育の心理学Ⅰ 保育実習指導Ⅰ	乳児保育Ⅱ 保育の心理学 保育実習指導Ⅰ
3年2・3月	保育実習Ⅰ	保育実習Ⅰ
4年前学期	保育の心理学Ⅱ 保育実習指導Ⅱ又はⅢ 保育実習Ⅱ又はⅢ	保育実習指導Ⅱ又はⅢ 保育実習Ⅱ又はⅢ

旧養成課程では「保育の心理学Ⅱ」のみ「保育実習Ⅰ」が終わり「保育実習Ⅱ又はⅢ」に行くまでに受講していた。新課程では、保育実習にて既習の教科目の内容を踏まえ、実際に乳児と触れ合い、乳児保育を観察及び体験して、乳児保育に関する理解を深められるよう、「乳児保育」および乳児保育に関わる関連科目全てを受講してから「保育実習Ⅰ」を迎えるようにカリキュラムを編成した。この効果については、今後検証していくこととする。

2. 本学学生における乳児保育に関する課題

旧養成課程の「乳児保育（演習2単位）」の中で、乳児への援助の実際について演習を通して身に付ける。赤ちゃん人形を使い、あやす、語りかける、抱っこ、おんぶ、授乳、おむつ替えなど、乳児期及び幼児期前期に必要な特徴的な保育技術について学ぶ。この演習に取り組む、上手く実践できずに不安を覚える学生がいた。これまで乳児に関わった経験のない学生であった。

2013（平成25）年の工藤調査^{4）}では、乳幼児をもつ保護者の55％が子どもの世話の経験や目撃する機会もなく、我が子の子育てを開始したという結果であった。では、本学教育学科幼児教育コースの学生はどうであろうか。毎年、入学生に対してアンケート調査を実施しているが、「弟や妹のお世話をしていた」「近所の年下の子ども、親戚の子どもをあやしたり一緒に遊んだりしていた」「小さい子どものお世話をするのが好きだったので、小さい

子がいると自分から関わっていった」などの体験をしている学生が約7割を占める。保育者を目指す学生であり、子どもに対する関心が高く、保育士養成課程入学前に既に乳児と関わる機会を経験している学生の割合が高い。しかし、残る約3割は「赤ちゃんを抱っこしたりあやしたことがない」「おむつ替えをしたことがないし、見たこともない」「ミルクを飲ませたことがないし、見たこともない」「言葉が理解できない子どもにどのように接して良いかわからない」など、乳児と向き合うこと、関わることへの不安をもつ学生もいる。乳児期及び幼児期前期の発達の特徴の理解が不十分であること、またその時期の特徴的な保育技術の獲得が出来ていないことから考えると考える。

また、「保育実習Ⅰ」に向けて行う「保育実習指導Ⅰ」の中で、乳児保育に関する保育実践の計画及び模擬保育を行った。その際、乳児には難しすぎる保育内容を計画したり、模擬保育の際に乳児が理解困難な言葉を使ったりする姿が見られた。乳児期及び幼児期前期の発育・発達に関する知識が不十分であることから考えると考える。

3. 新保育士養成課程における乳児保育の展開

1) 乳児保育における養護と教育の理解

保育所はそもそも養護と教育を一体的に行う所である。子どもにとって保育所は生活時間の大半を過ごす場所であることから、保育所保育指針の保育の目標にあるように、「十分に養護の行き届いた環境の下で、くつろいだ雰囲気の中で子どもの様々な欲求を満たし、生命の保持及び情緒の安定を図る」⁵⁾ことに留意しなければならない。

保育所保育指針では、養護に関するねらい「生命の保持」、「情緒の安定」の2つがある。そして乳児保育のねらいは「健やかに伸び伸びと育つ」、「身近な人と気持ちが通じ合う」、「身近なものに関わり感性が育つ」の3つがある。これらは一体となって展開されるものであるが、保育実践の経験のない学生にとっては、具体的にどのように展開すべきかイメージできない学生が大半である。さらに、養護と教育はそれぞれ違う場面、別々の時間に行われるものであると理解している学生もいる。

そこで、保育の場面の映像を見せながら、養護と教育とは具体的にどのような関わりなのか解説を行いながら理解を図った。

乳児が泣いて不快を表す場面である。乳児は自分が持ち合わせる力を使って保育者に訴えた。養護の側面として、保育者は乳児の不快の原因を探り、取り除こうと試みた。乳児を抱く、仕草や顔の表情を見る、話しかけるなどしながら、吸引反射に気付き、ミルクを飲みたい乳児の思いを把握した。そして、ミルクを飲ませるという

「生命の保持」に関する保育実践を行った。ミルクを飲んだ乳児は自分の欲求が満たされ、その結果、「情緒が安定」し、教育的側面としての「身近な人と気持ちが通じ合う」経験をした。養護的側面である「生命の保持」と「情緒の安定」が図られ、教育的側面である「身近な人と気持ちが通じ合う」育ちが、1つの関わりの中で同時に展開されていた。

上記のように、乳児の中に何が育っているのか、また保育者は養護と教育を一体的に行う援助をどのように行っているのか、保育場面の事例を通して理解を図った。具体的な場面の解説が養護の側面、教育の側面、養護と教育の一体性の理解に有効であった。

2) 乳児期の発育・発達理解不足への対応

3年後学期の「保育実習指導Ⅰ」の科目の中で、産休明けの57日目から乳児保育を行っている保育所を選んで保育所保育の体験を行った。保育実習指導を履修する学生のほとんどが、直前の8月に3週間の幼稚園における教育実習を経験している。そのため、3～5歳の子どもに関する発達を実際の子どもの姿を通して理解し、保育実践の在り方についてもイメージできるようになっている。そこで、保育所保育の体験では、0歳児クラス、1歳児クラス、2歳児クラスの乳児保育の見学及び保育体験を中心に行った。

0歳児クラスでは、学生（6～7名）が保育室に入ると0歳児に注目された。刺激しないようにさりげなく観察をする学生と、なんとか仲良くなろうと言葉をかけたり関わったりして泣かれる学生がいた。0歳児が何を訴えているのかを感じ取ることの必要性、安心できる人とそうではない人との違いが分かる発達段階であることを学ぶ機会となった。

また、保育者が0歳児と一対一で「いないいないばあ」をしたり、抱っこしてゆらゆら揺らしながら歌をうたう「リズムあそび」をしたり、体をなでたりくすぐったり足を伸ばしたり縮めたりする「ふれあいあそび」を行っている様子を観察した。こうして0歳児が保育者と遊ぶことを喜ぶこと、保育者は遊びを通して乳児を育てようとしていることを観察を通して学ぶ機会となった。

1歳児クラスでは、運動遊びをする様子を見学した。マットを重ねて作った緩やかなスロープをハイハイで登り降りする子ども、保育士に手を取ってもらいゆっくり歩いて登り降りする子どもがいて、何度も繰り返し登り降りを楽しんでいた。また、トンネルをくぐる、滑り台の階段をハイハイして登り、滑り降りるなどの遊びも行っていた。今まさに成長しようとしている身体諸機能を使って遊ぼうとする1歳児の実態を知る機会となった。また、保育者が「順番ね」と言葉がけると、前の人を押したり

横入りしたりせず待つ様子も見られた。

運動遊びの後は、手を洗って絵本を見る活動であった。腕まくりは保育士に手伝ってもらい、泡の石鹸を付けて自分で洗っていた。手洗いが終わった子どもから保育士の所に集まり、絵本を読んでもらうことに期待をして待っていた。「おおきなかぶ」の絵本が始まると、12人全員が絵本に注目し、お話の世界を楽しんでいた。

2歳児クラスでは、マラカス作りを行っていた。12cm位のペットボトルに大きめのビーズやストローを切った物などを指で摘まんで入れ、最後に保育士に手伝ってもらいながらキャップを閉めた。できたマラカスをもって、CDプレーヤーから流れる曲に合わせて鳴らすことを楽しんでいた。

その後、保育者がトイレに誘っていた。おむつが外れていて、布パンツを使用していた。ズボンとパンツを自分で脱ぎ、便器に座り用を足し、トイレトペーパーを自分で使う子ども、保育士に拭いてもらう子どももいた。最後に自分でパンツとズボンを履き、手を洗って戻っていった。ズボンが引っかかり上手く上げられない子どもがいて保育士が「手伝おうか？」と言言葉がけると「いや」と首を振り手伝わらうことを拒否した。まさにイヤイヤ期の反応であった。保育士は、「自分ですの。偉いね。」と言言葉がけ、様子を見守っていた。時間はかかったが、自分で行えた。保育士は「できたんだ。すごいね。」と褒め、子どもは誇らしげな表情になった。イヤイヤ期の子どもの反応と保育士の関わりを見ることが出来た。また、排泄に関わることを一通り自分でできる子どもがほとんどである2歳児の様子に驚く学生が多かった。

保育所での乳児保育の体験後に、振り返りを行った。そこでの学生の振り返りは以下のようなものであった。

表3 保育所での乳児保育体験の振り返り

乳児の発達	生後6か月の赤ちゃんは寝ているばかりではなく、起きている時は保育士と遊んでいた
	0歳児のクラスに入った途端に、何人もの子どもにじっと見られ、人見知りの反応を体験した
	1歳児クラスでマットを登る時に保育士が「順番ね」と言うと、待っていたことに驚いた
	1・2歳児が絵本の読み聞かせを集中して聞いていたことに驚いた
	2歳児の上手く出来なくても、自分でやりたいというイヤイヤ期の反応を見た
保育者の役割	0歳児の喃語に対して、保育士が応えていた
	0歳児が「いないいないばあ」の遊びを声を出して喜んでいて、発達に応じた遊びを選んで行っていることを感じた
	1歳児で入園して3日目の子どもが泣いていることが多かった。保育士が抱っこしている時間が長く、安心できるように関わっていた。
	1歳児に、パンツを足にかける、靴下を足にはめるなどして、後は子ども自身でさせていた
	1歳児がおもちゃの取り合いをして叩き合いになると、

保育の展開	保育士がさっと間に入っていた
	2歳児のイヤイヤ期の反応を受け入れ、自分でさせるようにしていた
	1歳児12人で運動遊びを楽しんでおり、同じ活動に取り組めることを知った
	2歳児のクラスで製作活動を行っており、できることを保育者が考えて保育実践していた
保育の展開	1・2歳児の絵本の読み聞かせは子どもたちが集中していて、興味・関心に応じた活動であると感じた

乳児の発達、保育者の役割、保育の展開についての振り返りがされていた。振り返りの内容は今まで「乳児保育」の授業の中で学んできたことばかりであるが、乳児に関わったことのない学生にとっては、今回の乳児保育の体験を通して理論と実践が結び付き、理解が深まったようである。理論と実践を行き来することにより、乳児の発達・発達、乳児保育の展開の在り方理解に有効であった。

3) 乳児保育を構想する力を養成するための対応

学生たちは、少子化社会の中で成長してきている。8割以上の学生が核家族であり、子どもを見る機会、関わる機会が限られている中で育ってきた。子どもの発達・発達について「乳児保育」「保育の心理学」「子どもの保健」などの科目で学んでいるが、実体験を通して学んでいないことから、実際に保育を考えた際に生かされていない学生がいた。それは、乳児を対象とした模擬保育を行うことで、確認された。

例えば、1歳児を対象に型はめ遊びを計画し、教材を製作した学生がいた。試行錯誤して、穴と同じ形の積み木を探してはめることによって「集中力」「手先の器用さ」「形や大きさの認識力」を養うことが出来る遊びである。学生が作った型はめは、大きな四角もあれば小さな三角もあり、小さな三角は大きな四角の型の部分にもはまってしまう物であった。「ぴったりはまったという達成感が味わいにくく、形や大きさの認識につながらない遊びである」と周囲の学生から指摘を受けたところ、「この形でもはまるのだという問題解決力を育てたい」との説明であったが、1歳児には難しい課題である。

また、ある学生は2歳児を対象に科学する心を育てたいということで、牛乳パックで作った電車を、磁石のS極とN極の組み合わせを考えながら繋げて遊ぶものであった。「組み合わせによっては繋がらないものがあるが、2歳児であれば電車が繋がる楽しさを味わう教材の方が望ましいのではないか」という意見が出された。「どうして繋がったり、繋がらなかったりするのかわかさせたい」との主張であった。磁石の性質について学ぶのは、小学校3年生である。磁石の仕組みを遊具に取り入れることは良いが、性質について2歳児に考えさせるのは難しいであろうことを指導した。

このように模擬保育を行ってみたところ、乳児保育の展開であっても、3・4・5歳児向けの保育内容や展開を考える学生がいた。

そこで、1年次からの発達・発達に関する学びの積み重ねと、実際の子どもと触れ合う機会を通しての実践知が積み重なる方法を考えた。1年前学期の「保育内容総論」の科目の中で、生後6か月までの乳児、6か月～1歳3か月くらいまでの乳児、1歳3か月～2歳くらいまでの乳児、2歳児、3歳児、4歳児、5歳児の発達に関するシートを渡し、他の科目で学んだこと、保育現場の体験や日常生活の中で実際の子どもと触れ合ってきた子どもの発達に関する情報を書き加えていく取り組みを始めた。



図3 発達・発達に関するシート

このシートを活用して、乳児の発達・発達を実際の子どもの姿と結び付けて理解していくことを期待する。効果については、今後検証していくものとする。

さらに、「保育内容総論」「乳児保育」「保育内容指導論」などの科目及び保育現場の見学やボランティアなどで学んだ子どもを育てる遊びを記録し、乳児を含む保育内容や具体的な展開について習得する遊びのシートを活用した取り組みも始めた。

表4 子どもを育てる遊びシート

ねらい	対象	遊び
いろいろな物に興味をもつ	0歳児	ベビーカーに乗って散歩
戸外の心地好さを味わう	1歳児	散歩カーに乗って散歩
自分の足で歩こうとする	1歳半	歩いて散歩
保育者とのふれあいを楽しむ	0歳児	輪になって遊ぶ
自分の順番を待つようになる	1歳児	
なりきることを楽しむ	2歳児	動物になったつもり遊び

このシートを活用して、乳児の発達・発達を踏まえた

保育計画が立案できること及び保育実践力が身に付くことを期待する。効果については、今後検証していくものとする。

4) 乳児期及び幼児期前期に特徴的な保育技術の獲得への対応

乳児保育の科目の中で、赤ちゃん人形を用いて、抱っこ、語りかけ、寝かしつけ、おむつ替え、授乳、沐浴、着替えなどの演習を行う。ほとんどの学生が、この学びの中で一通りできるようになるが、中には1～2回の体験では身に付かず、保育所及び乳児院等での保育実習に不安を示す学生がいた。

そこで、講義の中で学んだことを、空いている時間に習得するまで取り組めるように、赤ちゃん人形、おむつ、哺乳瓶、ベビーバスなどを準備しておいた。乳児院に実習に行く学生が、何度も繰り返し取り組む中でおむつ替えを習得し、不安を解消してから実習に臨むことができた。

保育技術の獲得は、乳児との関わりや乳児保育の目撃の有無もあるが、繰り返しの中で身に付くところが大きい。保育技術を獲得するための時間と取り組み場所を保障することで改善を図ることができた。

IV. まとめと考察

新保育士養成課程では、乳児保育の需要の拡大を受け、「乳児保育Ⅰ（講義2単位）」と「乳児保育Ⅱ（演習1単位）」というように講義科目が新設され、演習科目が1単位減り、講義科目が2単位増えた。この科目の中で、乳児保育に関する理念や現状、保育の体制など、必要となる基礎的事項について理解を深めた上で、具体的な保育の方法や環境構成等を学び、より円滑に保育の実践力の習得につなげていくことを目指している。また、乳児保育に関する関連科目である「保育の心理学」では乳児の心の発達について捉え、「子どもの保健」では乳児の身体的な発達・発達について捉え、「保育内容総論」では乳児保育の内容・展開について捉えることが求められている。

本学の学生の現状として、保育者を目指す学生であり、乳児を含む子どもに対する興味・関心は高いが、核家族の中で育ち、乳児と関わる機会は限られていた。そのことから、乳児期及び幼児期前期に特徴的な保育技術の獲得が出来ていない、乳児の発達・発達に関する実践知が不十分である学生がいた。

これらの知識及び技術を習得するためには、「乳児保育」の授業での学びは勿論であるが、保育士養成課程の様々な科目の中で、反復しながら学んでいくこと、身に付けていくことが必要である。また、理論と実践を行き来することで、より確実に身に付いていくことができる。

そのためのツールとして、「発達・発達に関するシート」、「子どもを育てる遊びシート」を取り入れたところである。このシートを活用することで、乳児保育に関する様々な科目の学びを集約して、実践に生かすことができると考える。特に保育士養成科目は、非常勤の教員が担当する科目もあり、科目間の連携の重要性は理解しているが、教員間の横のつながりが持ちにくい現状にある。学んでいる学生自身が科目と科目をつなげ、繰り返しの中で乳児保育の実践力を高めるために有効である。

また、「保育実習指導Ⅰ」で乳児保育を体験したことで、乳児に触れてきた経験の不足による、乳児の発達・発達の理解不足を解消することにつながった。そして、乳児保育等で学んだ理論と保育現場での実践がつながるきっかけとなった。実際に乳児と関わる機会、乳児保育を体験する機会を通して実践知を高めていくよう展開することが乳児保育の実践力を養成するのに有効である。

さらに、「保育内容総論」、「保育実習指導Ⅰ」では、KJ法を活用し、学生それぞれの学びをグループ及び全体で共有し、自分に必要な知識を習得するのに有効であった。また、模擬保育を通して、保育の計画と実際の子どもへの関わり方の妥当性を認識できた。これらのことから、乳児保育の知識及び保育実践力を習得するために有効な方策についても今後検討していきたい。

V. 引用文献

- 1) 厚生労働省（2018）、「保育所等関連状況取りまとめ（平成30年4月1日）」
- 2) 厚生労働省（2016）、「保育所保育指針の改定に関する議論のまとめ（平成28年12月21日）」
- 3) 厚生労働省保育士養成課程等検討会（2017）、「保育士養成課程等の見直しについて～より実践力のある保育士の養成に向けて～」
- 4) 工藤ゆかり（2013）、「幼児の基本的な生活習慣の形成に関する研究—おむつの使用離脱に着目して—」、聖徳大学大学院児童学研究科児童学専攻保育学コース修士論文（未公開）、p68
- 5) 厚生労働省（2017）、「保育所保育指針」

Development of “Infant Childhood Care” in the New Childhood Care Workers Training Course

Abstract

In the past seven years, the rate of use of infant childhood care has increased 1.5 times, and infant childhood care has been expanding. Along with that, the childhood care workers training course was revised, and from April 2019, the childhood care workers training in the new course started. In “Infancy childhood care,” a new course was added and the number of credits increased by one. In this course, after deepening the understanding about the basic matters that are necessary, such as the concept and current conditions regarding infant childhood care and the system of childhood care, learn specific childhood care methods and environmental configurations etc., and make childhood care more smoothly. It aims to lead to the acquisition of practical skills. In addition, “Psychology of childhood care”, which is a related subject related to infant childhood care, captures the development of the heart of the infant, “Health of children” captures the physical growth and development of the infant, and “childhood care content overview” provides information on the childhood care of infants. It is required to capture the contents and development.

As the present condition of the students of this university, since the opportunity to grow up in the nuclear family and to be associated with the infant is limited, understanding about the development and development of the infant that can not acquire the characteristic childhood care technology in the infancy and the early childhood confirmed that there are students who are inadequate. In order to acquire these knowledge and techniques, it is necessary to learn and learn repeatedly in various subjects of a childhood care workers training course, of course, learning of “infant childhood care”. As a tool for that, “sheet for development and development”, “play sheet for raising children” was adopted. This is considered to be effective for the student who is learning itself to connect the subject and the subject, and to improve practicality of infant childhood care in repetition. In addition, the experience of infant childhood care in childhood care training led to an opportunity to connect the theory learned in infant childhood care related subjects and the practice in the field of childhood care. Infant childhood care in future new childhood care worker training course is developed to enhance practical ability of infant childhood care while going back and forth between “infant childhood care” and cooperation of related subjects and theory and practice of childcare field learned in each subject do.

Key words: Higher utilization rates for infant childhood care

Cooperation of infant childhood care and related subjects

Back and forth of theory and practice